二〇世紀前半における米生産をめぐる蘇北と蘇南の經濟關係

弁納才一

はじめに
一　生産面
（一）米の生産
（二）耕作體系
二　流通面
（一）米
（二）肥料
おわりに

はじめに

抗日戰爭以前における江南の地價は、一畝當たり約一〇〇元で、勞賃は一日當たり〇・四～〇・五元だったのに對して、江北では肥沃な土地でさえも、その地價は一畝當たり約三〇元で、勞賃は一日當たり〇・一～〇・二元にすぎなかったと言われている。(1) このことからも、江南と江北の間に經濟的な格差があったことを明確に窺い知ることができる。江北ないし蘇北は、本來は單に江南ないし蘇南の對義でしかなく、地理的には長江を境として南北に分けた地域の名稱にしかすぎな

いが、先進的で豊かな發展した蘇南に住む人々は、蘇北を後進的で貧しく停滞した地域として蔑みの目を以て捉えてきた。(2)

しかし、蘇北の「貧しさ」と蘇南の「豊かさ」とは、相互に密接に關わり合いながら歴史的に形成されてきた經濟構造の表裏を成していたと見るべきであろう。しかも、本稿で後述するように、蘇南を構成する各地域の農村經濟構造が必ずしも一様ではなかったのと同様に、蘇北も各地域ごとに多様で複雑な農村經濟構造を形成していた。(3)

例えば、江蘇省において米の生產が近代にも依然として極めて重要な位置を占めていたことは、全耕地面積に占める米作地の割合が高かったことや消費の面でも米が主食としての地位を占めていたことから明らかであるが、米作地が耕地面積全體に占める割合や產米量が農業生產量全體に占める割合、さらに、それが農村經濟全體に占める位置は、各縣によって相當の差異があった。そして、江蘇省ではウルチ米の中のインディカ種米とジャポニカ種米とがともに栽培され、その兩方が消費もされていることが、江蘇省における米生產の複雜性をより一層高めることにつながっているようにも見える。このような米の生產に見られる各縣ごとの差異に鑑みるだけでも、江蘇省の農村經濟構造がかなり複雜な狀態にあり、單に蘇北と蘇南に二分して對照的な地域として捉えるだけではその實態及び動態を理解することができないことは明らかであろう。

そこで、本稿では、米作を中心に据えて近代江蘇省農村經濟構造の一面を明らかにすることを主目的とするが、その際、ただ單に各地域間の經濟的な差異を明らかにするだけにとどまらず、各地域の農村經濟が米の生產をめぐって相互にいかなる關係性を形成しながら展開していたのかについても分析し、さらに、そのような生產面に大きな影響を與えたと考えられる流通面についても言及し、構造的かつ複合的に考察してみたい。

一　生産面

（一）米の生産

江蘇省におけるウルチ米の生産量は、一九一〇年代中頃に二、〇〇〇萬擔臺だったが、その後は跛行的ながらも増加し續け、一九三三年には九、〇〇〇萬擔臺にまで増加している。ちなみに、一九一四年と一九三六年を比較してみると、栽培面積では約一・四倍に増加し、また、生産量では實に約二・九倍にも増加している。(4) このことは、單位面積當たりの産米量が大幅に増加していたことをも示している。こうして、元來から主要な産米地の一つだった江蘇省は、一九三〇年代には中國における主要な産米地としての地位をより一層高めていったと考えられる。

抗日戰爭以前における江蘇省（上海市を含む）は、蘇北の最北部に位置する淮陰・銅山・睢寧・漣水・豐縣・沛縣・邳縣などの諸縣を除けば、みな産米地で、特に蘇南（上海市を含む）の無錫・常熟・吳江・武進・崑山・宜興・江陰・吳縣・靑浦、及び、蘇北の中部（裏下河地區）に位置する東臺・高郵・寶應・江都・泰縣などの諸縣が最も稻作が盛んだったと言われている。(5) すなわち、蘇北の中部地域と蘇南の長江沿岸地域が江蘇省における主要な産米地となっていた。ただし、東亞同文書院「大正十年七月（第十五回）調査報告書」では、「江蘇省ハ徐州、海州、淮安、揚州、通州、鎭江、江寧、常州、蘇州、太倉、松江ノ一一府州ヨリ成リ、蘇州、常州、松江、太倉、江寧等ヲソノ米産地ノ主ナル」ところとし、江蘇省における主要な米産地の中から蘇北の各縣を除外しており、また、同報告書の中で「農商務省農務局事務員小平權一氏ノ大正五年五月ノ調査」を引用して、一畝當たりの産米量について、蘇南の上海・常熟が二・五石、蘇南の松江・蘇州・太倉・無錫及び蘇北の通州が二・〇石、蘇南の江寧と蘇北の揚州が一・五石、淮安・徐州が一・〇石だったとしており、(6) 全體的傾向として蘇南に比して蘇北における米の生産性の低さが示されている。

表1　上海市9縣の稻作面積と生産量（單位：萬畝・萬擔）

	1930年						1932年			1935年	
	面積			生産量			生産量			面積	生産量(餘剩量)
縣名	合計	ウルチ米	モチ米	合計	ウルチ米	モチ米	合計	ウルチ米	モチ米		
松江	57.2	57.2	0	132	132	0	150.1	150.0	0.1	62.8	149.3(＋27.8)
青浦	37.7	34.1	3.6	103	93	9	114.2＋	109.8	4.3	63.2	150.2(＋62.0)
南匯	37.2	31.2	6.0	101	96	15	72.0	65.3	6.6	32.5	64.5(－77.4)
金山	24.2	20.5	3.7	72	61	11	55.0＋	44.0	11.0	29.6	98.7（＋4.7)
嘉定	23.1	18.8	4.3	60	49	14	21.2	17.0	4.2	12.7	24.9(－20.0)
寶山	17.7	16.5	1.2	49	46	3	21.7	16.5	5.1	14.1	27.5(－12.4)
上海	14.3	12.9	1.4	36	33	2	36.3	33.4	2.9	6.7	15.8(－19.7)
奉賢	9.7	7.3	2.4	22	16	5	29.4	29.4	0	21.1	27.6(－40.5)
川沙	6.4	5.3	1.1	19	16	3	13.0	12.0	1.0	4.2	9.0(－27.0)
總計	227.5	203.8	23.7	594	542	62	512.9	477.4	35.2	246.9	567.5

典據）　1930年と1932年は實業部國際貿易局編『中國實業誌（江蘇省）』（1933年）第5編10～19頁・35～38頁，1935年は中國銀行經濟研究室『米』106～110頁（ただし，面積が『實業部月刊』，生産量が『江蘇建設月刊』第3卷第4期に據ったとしている）より作成。なお，1932年の生産量の「＋」は餘剩米があったことを表している。また，比較に便するため，1935年の生産量の單位を市斤から擔へ換算し直した。

表2　蘇南18縣の稻作面積と生産量（單位：萬畝・萬擔）

	1930年						1932年			1935年	
	面積			生産量			生産量			面積	生産量(餘剩)
縣名	合計	ウルチ米	モチ米	合計	ウルチ米	モチ米	合計	ウルチ米	モチ米		
吳縣	159	⑧66	92	③393	⑨169	223	⑥258	199	58	②153	③310（－64)
昆山	111	②89	22	⑤320	③259	61	⑬138＋	132	6	⑧103	⑪146（＋62)
溧陽	104	⑦80	23	①441	②349	92	②375＋	300	75	⑥107	④304（＋76)
宜興	103	①95	8	②425	①392	32	①425＋	392	32	④119	②449(＋116)
無錫	102	⑥82	19	⑦298	⑤244	54	⑤270	260	10	⑨102	⑥291（＋14)
武進	99	③86	13	⑥299	③259	39	⑨170＋	160	10	①158	①846(＋144)
江寧	98	④85	12	④332	⑥215	117	③372＋	360	12	⑦103	⑨240（＋16)
常熟	95	⑤84	10	⑨238	⑦211	27	④300＋	250	50	③135	⑧241（＋32)
丹陽	79	48	30	⑩237	142	95	⑪158	94	63	⑱ 29	⑫134(－102)
吳江	72	⑨54	18	⑪228	⑩164	54	⑦250＋	225	25	⑤118	⑩190（＋13)
江陰	70	⑩53	17	⑧255	⑧192	62	⑩166＋	133	33	⑪ 77	⑤296(－143)
金壇	68	30	37	⑫194	91	102	⑫153	73	80	⑩ 81	⑦290(＋138)
鎭江	55	49	6	⑮123	113	13	⑱ 38	28	9	⑬ 43	⑰ 61（－31)
句容	52	49	2	⑬150	142	8	⑧181＋	158	23	⑫ 60	⑬108 （－9)
高淳	42	37	5	⑯107	91	16	⑭138	130	8	⑮ 30	⑭ 91（＋14)
太倉	23	19	3	⑰ 69	58	11	⑰ 43	40	3	⑰ 30	⑱ 43（－30)
揚中	20	17	2	⑱ 65	57	8	⑯ 45	40	0.5	⑯ 30	⑯ 64（－61)
溧水	17	11	6	⑭129	110	18	⑮122＋	120	2	⑭ 42	⑮ 80（－59)
總計	1,369	1,034	325	4,330	3,258	1,032	3,653	3,094	499.5	1,572	4,490

典據）　**表1**に同じ。なお，表中の①・②・③などは順位を示す。

表 3　蘇北27縣の稻作面積と生産量（單位：萬畝・萬擔）

	1930年						1932年			1935年	
	栽培面積			生産量			生産量			面積	産量(餘剩)
縣名	合計	ウルチ米	モチ米	合計	ウルチ米	モチ米	合計	ウルチ米	モチ米		
鹽城	161	①160	1.0	②371	②369	2	②247	246	1.4	②189	④451（＋180）
高郵	150	②139	0.7	①454	①422	31	⑩ 90	50	40	①199	①704（＋304）
寶應	138	⑧ 79	8.4	④323	⑦204	119	③215	136	9.4	⑦ 99	⑥294 （＋81）
興化	125	③125	0	③344	③344	0	⑲ 16	0	16.3	④167	②496 （＋44）
江都	119	④119	0	⑥239	④239	0	①371	347	4.4	⑤151	⑤424 （－51）
如皐	118	⑥ 84	0.4	⑤315	⑤226	88	④210	151	59.0	⑭ 22	⑮ 40（－202）
南通	92	⑤ 92	0	⑦218	⑥218	0	⑦103	80	23.5	⑩ 65	⑧258 （－51）
泰縣	84	⑦ 78	6.2	⑧200	⑧187	13	⑤134	125	9.0	⑥134	③481 （＋16）
淮安	70	⑩ 59	1.3	⑨186	⑨163	23	⑥124	108	15.8	⑧ 96	⑨254 （＋81）
東臺	67	⑨ 63	4.2	⑪147	138	9	⑧ 98	92	6.1	⑨ 83	⑩243 （－72）
六合	58	52	5.6	⑩161	147	13	⑮ 42	41	0.4		
阜寧	58	35	3.3	⑮114	74	43	⑯ 25	55	10.0	③175	⑦259 （±0）
儀徵	55	46	9.9	⑬141	119	22	⑬ 50	50	2.0	⑮ 22	⑭ 78 （－41）
靖江	47	43	4.7	⑫164	⑩150	14	⑪ 66	45	21.1	⑬ 32	⑫146（－463）
泰興	39	36	2.9	⑭127	118	8	⑫ 62	62	0	⑪ 48	⑪202 （＋96）
崇明	34	28	5.8	⑯102	87	15	⑨ 90	72	18.0	⑫ 40	⑬ 96（－444）
沭陽	27	13	3.5	⑰ 53	27	26	0	0	0	⑲ 12	⑱ 11 （－1）
海門	25	22	3.2	⑱ 52	45	6	5	5	0.7	0.6	2 （－58）
江浦	17	13	3	⑲ 43	34	8	⑭ 47＋	45	2	⑯ 18	⑯ 38 （＋3）
贛榆	14	6	8.4	⑳ 30	13	17	⑱ 20	8	11.5	⑰ 18	2 （－14）
啓東	8	4	4.2	13	6	6	2	2	0	1	0.8 （－4）
東海	8	4	4.2	21	11	9	⑰ 24	18	6.1	⑱ 17	⑰ 16 （－9）
灌雲	5	5	0	17	17	0	⑳ 11	11	0	0	0
泗陽	5	5	0	9	9	0	0	0	0	0	0
宿遷	0.9	0.9	0	1	1	0	0.2	0.2	0	1	0.07 （－0.8）
銅山	0	0	0	0	0	0	0.4	0.4	0	0	0
邳縣	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.008（－0.08）
總計	1,524.9	1,310.9	80.9	3,859	3,368	472	2,126.6	1,749.6	256.7	1,743.6	4,714.878

典據）**表 1** に同じ。なお，表中の①・②・③などは順位を示す。また，空欄はデータなし。

ところで、二〇世紀前半までの中國では、各年度の各省毎における稻作面積や產米量を知ることはできるが、縣レベルになると一部の年度のそれしか知ることができない。ちなみに、上海市・江蘇省の各縣毎における稻作面積や產米量について知ることができるのは、二〇世紀前半では、一九三〇年、一九三一年、一九三五年だけである（**表1**～**表3**を參照）。**表1**～**表3**により、以下において、上海市・蘇南・蘇北の三地域の各縣における稻作面積と產米量を比較してみることにしたい。

上海市では、稻作面積が最も廣かった松江縣でさえも五〇～六〇萬畝を超える程度にすぎず、その生產量は一五〇萬擔だったのに對して、蘇南では、吳縣の稻作面積が一五〇萬畝を超え、生產量が一九三五年における武進縣のように八〇〇萬擔を超えるところもあり、また、蘇北でも數縣の稻作面積が一五〇萬畝を超え、生產量が一九三五年における高郵縣のように七〇〇萬擔を超えるところがあった。

そして、各縣の產米狀況は、まず、上海市では、稻作面積は、松江縣、青浦縣、南匯縣、金山縣の順に廣く、一九三五年には一九三〇年と比べると、青浦縣で二倍近くに擴大し、松江・金山・奉賢の諸縣でも擴大したものの、その他の縣では減少しており、產米量は、一九三〇年と一九三二年には松江縣、青浦縣、南匯縣、金山縣の順に多かったが、一九三五年には青浦縣、松江縣、金山縣、南匯縣の順になっていた。この中でも、とりわけ一九三〇年代前半に青浦縣が稻作面積と產米量ともに擴大・增加した點が目立つが、これは、二〇世紀になって青浦縣で棉作から稻作への轉換が起こったことを反映したものであると考えられる(7)。

なお、上海市で餘剩米があったのは松江・青浦・金山の三縣のみで、この三縣が米を移出していたが、その他の縣は米不足で逆に米を移入していた。また、蘇南では、武進・常熟・宜興・吳江・溧陽・江寧の諸縣で稻作面積が廣く、吳縣・無錫縣・江陰縣がこれに次ぎ、この中には、一九三五年には一九三〇年よりも稻作面積が擴大して餘剩米を生じていた縣も多かったが、吳縣・丹陽縣・江陰縣では大量の食用米が不足していた。なお、金壇縣ではウルチ米よりもモチ米の生產

の方が多く、吳縣や丹陽縣でもモチ米の生産の比率がかなり高かった。さらに、蘇北では、高郵・鹽城・阜寧・興化・江都・泰縣、寶應・淮安などの裏下河地區が主要な米作地となっており、大量の餘剰米があったが、如皐・靖江・崇明・江都・南通・東臺・海門などの長江沿岸部の各縣では大量の食用米が不足していた。

次に、**表4**から蘇南と蘇北における米生産の上位五縣と上位一〇縣を比べてみると、一九三〇年と一九三五年には作附面積は蘇北が蘇南より廣くなっており、それにもかかわらず、一九三〇年と一九三一年には生産量は蘇南が蘇北より多かったが、一九三五年には蘇北の生産量が蘇南のそれを上回っている。このように、一九三〇年代には、蘇北の主要な米産地が蘇南のそれと比べて作附面積と生産量では決して遜色ないか、あるいは、凌駕する勢いにあった。そして、このような趨勢は、蘇南が蘇北よりもモチ米の生産が盛んだったことを考慮に入れるならば、食用米としてのウルチ米の生産では、より一層強くなる。また、一九三〇年と一九三五年の單位面積當たりの生産量を比較すると、上海は減少し、蘇南は微減したのに對して、蘇北は增加しており、一九三〇年には、蘇南が高く、上海と蘇北がほぼ同程度だったが、一九三五年には、上海が最も低く、蘇北が蘇南にほぼ同程度まで近づいている。すなわち、一九三〇年から一九三五年にかけて蘇北だけが米の生産性を向上させている。

近代の上海地區では、金山縣が米をほぼ自給できたが、上海縣は稻作面積が小さい上に園藝に重點を置いていたので、米が不足し、川沙・南匯・奉賢の三縣は稻作よりも棉作が盛んで、產米量は非常に少なく、上海市の中の主要な產米地だった松江・青浦の二縣から米を供給されていた(8)。この松江・青浦の二縣から一九三〇年代中頃に移出された年間約二五〇～二六九萬石の米のうちの二〇〇萬石近くが上海市街地に向けて販賣されたという(9)。

他方、蘇北の各縣を見てみると、まず、一九一〇年代末～一九二〇年代初頭の狀況について、東亞同文書院「大正十年七月調查報告」では、鎭江の對岸に位置する瓜州から淮陰縣淸江浦に至る運河沿いの「地方ハ揚子江以北ニ位スル江蘇ノ大平原地方ニシテ、農產物ハ頗ル巨額ニ上リ、特ニ米、棉花等ハソノ大宗ナリ」とし、瓜州の「米行ハ他地ニ比シテヤヽ

表 4　上海・蘇南・蘇北の米生産の比較（單位：萬畝・萬擔・担）

		1930年			1932年	1935年		
		栽培面積	生産量	1畝當り産量	生産量	栽培面積	生産量	1畝當り産量
上海	上位5縣	179.4	468	2.6	412.5	200.8	487.6	2.4
	9縣全て	227.5	594	2.6	512.9	246.9	567.5	2.2
蘇南	上位5縣	579	1,911	3.3	1,742	683	2,205	3.2
	上位10縣	1,022	3,238	3.1	2,767	1,179	3,457	2.9
	18縣全て	1,369	4,330	3.1	3,653	1,572	4,490	2.8
蘇北	上位5縣	693	1,807	2.6	1,177	881	2,556	2.9
	上位10縣	1,124	2,811	2.5	1,682	1,358	3,864	2.8
	上位20縣	1,498	3,798	2.5	2,089	1,723.6	4,698	2.7

典據）　**表 2** 及び**表 3** より作成。

大ナルモノアリ」、その北の仙女廟「附近ハ農産物ニ富ミ、特ニ米、棉花ノ市場ヲ以テ著ハ」れ、寶應縣「住民ノ主業トスル所ハ農業ニシテ米作ヲ中心トシ」、また、淮安「住民ノ主業ハ農業ニシテ、ソノ主ナル作物ヲ米、小麥、大豆等ト」し、その生産額は、米が八三萬一、三七二石、小麥が五五萬石、大豆が二一六萬石であるとし、さらに、淮陰縣の「主要産業ハ農業ニシテ、特ニ米、麥ヲ多ク産シ、高粱、落花生ノ産モマタ少ナシトセズ」と述べている。[10] そして、食糧について見てみると、山東省境に近い海州城（東海縣）の「居民一般の常食は玉蜀黍、高粱、小麥等[11]」で、贛榆縣歡墩埠は「生活程度を見るに極めて低く、其常食とする處は燒餅の類を主と[12]」し、徐州（銅山縣）の北の山東省境に近い利國驛では「米の産出殆どなく、居民は概ね粟を以て常食と[13]」していたのに對して、瓜州では「生活程度一般に低」かったと評價されながらも、「常食は米なり」とされ[14]、寶應縣の南に位置する高郵縣でも「米は居民の常食とする處なり」と報告されている。[15]

一方、一九二八～三〇年における蘇北の東臺・興化・鹽城の三縣を見てみると、まず、アルカリ土質で稻作には不適だったとされていた東臺縣では、作附面積の割合は、稻が四〇％、棉花が二二％、豆が一五％などとなっており、食糧の需要量は二八一萬餘石だったが、産米量は一九二九年が約二四萬擔で、やや豊作だった一九三〇年でさえも三一萬石餘りにすぎず、鹽城縣から米を移入していた。ただ、同縣民は麥を主食とし、玉蜀黍や高粱などを補助食としており、米産地でさえも米食と麥食が半々で、それ以外の地域では米食は一〇～二〇％を占めるにす

ぎなかったとされていた。[16] また、興化縣では、食糧の需要量が一五一萬石餘りだったが、その内の一〇～二〇％を麥で補っていたので、實際の米の消費量は一三〇萬石餘りで、產米量は一九二九年が一〇一萬石餘りで、豐年だった一九三〇年が二七一萬石餘りだったことから、[17] 年によっては餘剩米が出ていたと考えられる。あるいは、泰縣では、一九二八年に一七〇萬石餘り、一九二九年に九八萬石餘り、一九三〇年に二三三萬石餘りの米が生產された。[18] さらに、鹽城縣では、一九二八年に約一九七萬石の米が生產され、一九二九年には虫害によって平年作の三～四割にとどまったものの、一九三〇年には約二一五萬擔となり、產米量が增加したため、もともと麥を食べていたが、わずかながらも米を食べることができるようになったという。[19] しかも、『續修鹽城縣志』（一九三六年）によれば、鹽城縣では主に米を食べ、麥を食することは少なかったが、貧民の場合は米はおろか麥さえも常食とすることができず、冬季には野菜や人參を常食とし、夏季には瓜類を常食としていた。[20]

このように、蘇北の主要な米作地である鹽城縣・興化縣・東臺縣・泰縣では、一九二九年は凶作だったが、豐作となった翌一九三〇年の產米量は一九二九年の二倍以上となるなど、豐凶による產米量の變動幅は依然として大きかったものの、豐作時には相當の產米量があった。しかも、このような產米量の增加は、貧困層が相變わらず米はおろか麥さえも十分に食することができなかったとは言え、一部の人々が麥食から米食へ移行することを可能にした。

上海は、生活水準が比較的高いので、國內產のウルチ米よりも品質の劣る洋米（外米）は餘り歡迎されず、多くはジャポニカ種米が歡迎されていた。だが、ジャポニカ種米を栽培していた中國の農民は、ジャポニカ種米が洋米よりも高價なので、ジャポニカ種米を販賣して洋米を購入して食用としていた。[21]

上海・蘇州・無錫の米は、特に品質が良く、全國に冠たるものがあった。また、宜興縣では、ジャポニカ種の香米に次いで有名なインディカ種の杜尖は質的には香米よりやや劣っていたものの、生產量が多く、安價で、一般庶民による消費が最も多かった。あるいは、蘇北の如皐縣でも、インディカ種米はジャポニカ種米より安價で、「一般下級居民之歡迎」

を廣く受けていたとされている。(22)

以上から、一九三〇年代に蘇北の裏下河地區各縣における米作が量的に擴大し、かつ安定性を增すようになると、一部に麥食から米食に移行する稻作農家も見られるなど、生活水準の上昇が生じていたことが認められる。ただし、一般的には、蘇北の各縣では、インディカ種を栽培する農家の中で多數を占める中下層農民は主に麥類を主食としていたのに對して、上海市や蘇南の各縣では、ジャポニカ種を栽培する中下層農民がジャポニカ種米を販賣してジャポニカ種米よりも安價なインディカ種米を購入して消費していた。

(二) 耕作體系

江蘇省ではインディカ種の秈稻とジャポニカ種の粳稻という二種類のウルチ米が混栽されていたが、各々の栽培地には地域的偏在が見られると同時に、複雜な耕作體系が見られる。すなわち、「秈稻ノ主要栽培地域ハ揚子江北岸ノ大部分ト江南ノ丘陵地卽チ江寧、丹徒等ノ諸縣一帶デアル。粳稻ノ主要栽培地域ハ大茅山脈ノ以東、江南一帶ノ平野デアツテ、東進スルニ從ツテ漸次秈稻ノ栽培ハ少クナル。卽チ吳縣、松江、常熟、金山、寶山、崇明、太倉、嘉定等ノ諸縣ノ產米ノ大部分ハ粳稻ニ屬スル」とされ、また、「小麥ノ主要生產地ハ北部畑作地帶ト南部ノ揚子江兩岸ノ水稻裏作地帶トデアルガ、前者ノ生產ノ多キ縣ハ泗陽、漣水、銅山、蕭縣、沭陽、東海、邳縣等デ、後者ニ於テハ吳縣、無錫、武進、宜興、江寧、溧陽、常熟等ノ諸縣ガ代表的」(23)であるとされていた。

このように、ウルチ米の中でも、ジャポニカ種米が主に上海地區や蘇南の東部地域で栽培されたのに對して、インディカ種米は主に蘇南の西部地域や蘇北の裏下河地區で栽培された。また、小麥は、蘇南では米作の裏作として栽培され、蘇北では裏下河地區よりも北部に位置する地域で盛んに栽培された。

さて、以下では蘇北の主要な產米地だった裏下河地區各縣における作附け狀況を見ておきたい。

『淮安府志』（一八八四年）によれば、山陽縣（現、淮安市）東南部地域・鹽城縣・阜寧縣は稻作を主とし、豆や麥を間作していたのに對して、山陽縣以北の淸河縣・安東縣・桃源縣では麥作が中心だったとされている。[24] あるいは、淮安は、運河を境にして、その東側は米作が中心で、農民の主食は米だったが、他方の西側は稻以外に高粱や麥を栽培しており、農民の大半は雜穀を食べていたとされている。[25] そもそも、山陽縣東部地域はウルチ米の栽培に適し、西北部地域は麥・豆類・もち粟・黍・麻・もち黍の栽培に適し、[26] あるいは、東南部地域は麥やインディカ種米とモチ米の栽培に適し、西北部地域は麥・豆類・もち粟・黍・落花生・胡麻・菜種の栽培に適していた。[27]

一九三〇年代初頭の調査によれば、鹽城縣は東部の沿海部一帶が主に鹽場・荒地だったのを除くと、西部・西南部・西北部の諸地域は稻作地となっており、作附面積の割合は、稻が五二%、麥が二三%、豆が九%、棉花が八%などとなっていた。[28] また、『續修鹽城縣志』（一九三六年）によれば、鹽城縣西部地域は湖沼に近く、多くは腐植地で、年々稻の栽培が增え、東部地域の多くは砂質土で、主に豆・もち粟・玉蜀黍を栽培し、近海の地では棉花を栽培していた。[29] そもそも、『鹽城縣志』（光緒二年）によれば、鹽城縣の東部地域は高燥で麥作に適し、西部地域は低濕で稻作に適しており、晩稻は收穫量が少なく、また、早稻は播種・栽培が最も早く、夏の日照りや秋の水害を心配する必要がないという點で中稻に勝っていたが、質や味では劣り、早稻の一石は中稻の三斗（〇·三石）にしか値しなかったので、主に中稻を栽培していた。[30]

『甘泉縣續志』（一九二六年）によれば、甘泉縣（現在の揚州市區・邗江縣）では、西部地域は岡や山が多かったのに對して、東北部地域は湖沼に瀕し、[31] 湖沼の近くの圩田では主に陸稻が植えられ、運河沿い一帶における產米量も少なくなかったが、[32] とりわけ邵伯以東の地は產米地區で、數年來、米穀業が勃興し、平年作でも米麥の販賣量は一〇〇萬兩近くに達したという。[33]

江都縣は、一九四九年以前は東北部地域では主に早稻のインディカ種が單作され、長江沿岸地域では稻と麥の二毛作が行なわれ、年間一〇〇擔以上の米・麥・落花生が移出された。[34] また、『江都縣志』（光緒七年重刊）によれば、江都縣を含

む揚州は「山田」が多く、インディカ種の栽培に適し、宋代に干害に強い占城稲を購入して長江・淮河間の高田に栽培して以来、早稲を栽培するようになった。[35] ただ、『江都縣續志』（一九二六年）によれば、秋の水害を避けるために早稲を多く栽培していた江都縣でも、水田ではモチ米が多く栽培され、[36] かつて米穀業が非常に盛んだった産米區域の江都縣仙女廟（江都鎮）も、光緒年間に米を禁輸してからは衰微したという。[37]

『重修興化縣志』（咸豐二年）によれば、興化縣は地勢のやや高いところでは麥や豆を栽培していたものの、それは全耕地の一～二割を占めるに過ぎず、水田では稲が植えられたが、土地が瘦せ、しかも、しばしば水害を被るため、多くの農民が早稲を植えていた。[38] あるいは、『續修興化縣志』（一九四四年）によれば、興化縣の一畝當たりの米の收穫量は、縣城附近が約二石五斗、縣城から六〇里以内では約二石、縣城から六〇里以上離れたところでは一石八斗で、東北部地域は地勢がやや高く、大麥・小麥・大豆などを栽培していた。[39]

周敦禮『寶應縣物產概況及改進計畫』（一九三四年一一月）によれば、寶應縣の全耕地面積約一五九萬畝のうち、水稲作地が約一〇〇萬畝、麥類・豆類・高粱・玉蜀黍などが約四〇萬畝で、水稲作が大きな比重を占めていた。[40] そして、『重修寶應縣志』（道光二二年）によれば、寶應縣の多くの農民は干害よりも水害をおそれていたので、湖沼に圍みをめぐらし、[41] しかも、水に強くて水沒しにくい觀音柳の稲苗を植え、逆に晩稲の上白米は收穫が最も遲く、水を嫌うので、敢えて植えることはなかったという。[42] あるいは、收穫量は多くなかったが、水害を避けるために三十子・四十子・五十子などの早稲を栽培した。[43]

『如皐縣志』（嘉慶一三年）によれば、如皐縣のうち、東南部地域はジャポニカ種、西北部地域はインディカ種の栽培に適していたという。[44]

阜寧縣は、東南部地域では主に稲が栽培され、西北部地域では主に麥が栽培され、[45] また、西北部地域では主要作物の大豆から油を搾った大豆粕が主要な移出品となっていた。[46] あるいは、阜寧縣の主要な農產物は稲・麥・豆・玉蜀黍・高粱・

甘藷・棉花・落花生などで、東部地域の大半は稲の一期作、西南部地域は二毛作で、豆・玉蜀黍・高粱・甘藷の栽培は西部・北部地域が最も多く、落花生は黄河沿岸や南部地域の沙岡で盛んに栽培され、第六區と第九區の開墾地では棉花が多く生産されていた。(47) そして、一九三〇年代における阜寧縣の全耕地面積約四五六萬畝のうち、水田が約一三七萬畝、畑が約三一九萬畝で、南部・東部地域では主に水稲が栽培された。(48)

『泰興縣志』（光緒一二年）によれば、泰興縣は麥と豆類の栽培に適し、稲はインディカ種が多く、ジャポニカ種が少なかった。(49)

以上から、蘇北の主要な米作地だった裏下河地區各縣では、土地が瘦せ、しかも、湖沼・低濕地が多かったために、頻繁に水害を被るという地質的氣候的條件を考慮して、主にインディカ種とりわけ早稲種を栽培せざるをえず、また、裏作としては麥類ないし雜穀類が栽培されていたことがわかった。

二　流通面

（一）米

中國では、すでに前近代においても米が廣範圍かつ大量に市場に出回っていた。そして、近代においても米が大量に市場に出回り、「鎭江、無錫、上海等の大市場は江蘇省の米穀集散地であると共に、全國米穀集散の中樞をなし」ており、(50) とりわけ「無錫ハ單ニ江蘇省米ノ集散地ナルノミナラズ、全國三大米市場（蕪湖・漢口）ノ一」(51)となっていた。

まず、中國全國における米の流通について、中國海關貿易統計を概觀しておきたい。

表5を見ると、一九一四～三七年における中國の米穀の輸出量は、一九三三年以降、幾分增加しているものの、一九三二年までは一二〇萬擔を超えた一九一九年を除けば、(52) 五萬擔を超えた年はそれほど多くはなく、比較的少量にとどまって

表5　米穀の移輸出量（單位：萬擔，1934年から萬公擔）

年度	輸出量合計	移輸出量合計	主要移出地						
			天津	長沙	岳州	漢口	九江	蕪湖	上海
1910		450.4	0	3.5	0.4	0	6.8	358.2	77.3
1911		535.7	0	107.9	30.4	0	0	266.5	126.4
1912		641.5	0	102.3	55.7	0.6	2.7	456.2	17.8
1913		375.7	0.1	31.4	84.9	0	0	247.3	6.1
1914	2.7	312.8	0	60.0	6.4	0	0	227.1	14.5
1915	2.2	316.1	0	10.7	3.2	0	5.9	265.7	26.5
1916	2.2	469.6	0.2	18.6	7.3	46.7	36.6	335.0	21.1
1917	3.7	411.4	0	49.1	3.1	109.2	63.0	166.4	14.0
1918	3.3	387.8	2.6	0	0	2.8	46.3	319.0	12.1
1919	122.7	1,241.3	90.0	11.1	0	1.8	142.3	388.8	62.0
1920	31.1	947.6	3.9	227.9	6.3	5.1	210.1	471.5	14.5
1921	3.4	337.4	0	68.5	4.6	8.3	16.2	224.8	10.3
1922	4.5	211.2	0	61.5	7.5	8.0	26.3	82.9	10.3
1923	6.3	367.7	0	106.5	0	3.7	124.7	113.8	11.4
1924	4.1	798.4	0	231.1	0.3	5.2	244.7	298.5	9.7
1925	3.5	774.7	0	60.0	0	5.0	68.0	617.8	9.8
1926	2.9	204.7	0	2.8	0	7.0	6.7	157.7	9.1
1927	8.6	234.5	0	70.5	0	0.5	39.4	87.8	14.1
1928	2.9	602.7	3.0	167.2	1.1	0.5	139.6	248.3	29.5
1929	2.8	389.3	6.6	15.6	0	0	109.9	240.1	10.3
1930	2.7	245.5	4.9	15.8	0.1	0	34.4	169.8	12.6
1931	3.0	302.9	6.0	4.8	0	0	29.7	242.6	13.2
1932	3.6	182.5	0	17.6	0.1	1.5	12.8	130.4	11.6
1933	10.3	803.1	0	61.3	0.4	31.8	53.0	349.1	273.6
1934	6.8	440.3	0.5	65.9	0.2	41.3	4.4	121.8	147.2
1935	6.5	381.6	0	22.3	0.1	10.6	32.3	85.9	157.9
1936	26.8	723.2	0	81.0	0.5	42.0	183.7	161.9	177.1
1937	21.4	834.4	0.1	105.6	2.5	71.4	222.8	130.8	249.7

典據）　China. The Maritime Customs. ただし，移輸出量合計は1933年から移出量のみの合計となっている。また，空欄はデータなし。「0」は1,000擔（あるいは1,000公擔）未滿を示している。

表 6　米穀の移入量（單位：萬擔，1934年から萬公擔）

年度	移入量合計	主要移入地													
		大連	天津	煙臺	膠州	寧波	福州	廈門	汕頭	廣州	九龍	上海	拱北	江門	三水
1902	973.0														
1903	280.1														
1904	335.6														
1905	222.7														
1908	673.6														
1909	379.7														
1910	940.9	21.8	17.7	1.7	1.8	2.9	3.7	48.1	111.6	62.7	448.8	5.8	90.3	11.3	0
1911	530.2	25.8	4.7	0.7	0.4	0.5	1.3	76.8	20.1	23.0	263.3	0	70.8	7.4	0
1912	270.0	23.7	2.5	0.3	0	0	0	34.5	16.5	5.7	134.9	0	37.4	3.7	0
1913	541.1	22.9	30.8	3.3	2.3	1.6	15.5	39.9	9.9	36.6	280.5	0	38.2	19.3	0
1914	682.9	35.3	39.0	2.7	3.9	0.3	1.3	25.4	4.6	15.7	430.3	0	78.1	9.1	0.3
1915	848.5	27.1	22.8	7.6	2.5	14.0	0	42.7	39.1	40.1	475.9	0.4	113.4	11.3	8.2
1916	1,128.9	28.6	17.2	2.0	8.8	0	0.2	61.6	30.6	84.8	541.1	0	153.0	91.3	37.2
1917	413.2	9.3	89.4	45.6	13.4	16.3	12.2	13.3	174.4	28.8	0	2.1	0	0	0
1918	360.0	27.9	25.3	42.5	10.2	12.0	3.8	4.5	210.0	1.1	0	0	0	0	0
1919	1,063.9	25.1	57.4	26.6	2.0	2.1	0	30.2	259.7	636.7	0	7.9	0	0	0
1920	115.2	13.4	6.3	0	3.1	0	0	5.8	0.6	7.5	50.5	1.7	6.6	11.0	0.1
1921	1,063.9	41.7	59.2	15.2	13.8	7.3	35.3	50.0	143.1	39.1	528.0	3.2	70.5	27.9	0.8
1922	1,942.1	26.4	111.6	15.4	14.2	92.7	1.2	69.5	207.3	316.4	555.7	163.4	112.4	69.8	61.9
1923	2,244.7	15.6	106.0	11.5	18.0	100.9	17.7	63.9	283.0	745.0	230.4	131.3	154.7	151.8	105.4
1924	1,319.4	8.5	44.3	1.7	7.4	0.3	0.7	59.2	123.5	274.0	373.2	1.7	168.9	109.0	95.9
1925	1,263.9	16.0	117.4	5.7	8.9	17.6	16.0	85.0	73.6	292.9	253.2	15.3	109.0	51.5	32.7
1926	214.5	4.7	3.4	4.7	4.2	3.7	1.0	0	3.6	3.7	0	26.2	0	0	0
1927	202.3	9.2	27.1	10.2	5.2	32.3	7.3	3.3	49.8	4.4	0	33.9	0	0	0
1928	619.9	8.3	89.0	21.0	8.7	109.7	2.9	6.4	138.8	68.4	0	110.1	0	0	0
1929	387.6	4.8	67.2	16.4	7.4	39.2	0.6	0	76.1	37.1	0	46.7	0	0	0
1930	198.5	3.5	42.7	13.1	6.3	6.8	3.7	3.9	50.4	19.7	0	22.5	0	0	0.1
1931	322.9	8.0	32.0	12.1	9.1	33.2	0.2	1.4	58.9	119.1	0	11.3	0	0	0
1932	150.6	4.0	15.8	10.0	7.6	0.9	2.7	0.1	28.4	49.4	0	14.8	0	0	0
1933	785.6	0	142.6	30.8	25.9	43.8	71.3	14.6	256.3	61.4	0	87.0	0	0	0
1934	418.0	0	51.8	9.9	10.0	23.1	33.6	10.5	99.0	7.4	0	134.9	0	0	0
1935	353.4	0	70.6	15.7	11.7	14.8	1.1	1.2	52.0	2.8	0	88.4	0	0	0
1936	701.5	0	118.4	16.9	26.2	7.9	2.5	10.7	131.4	93.0	0	221.2	0	0	0
1937	847.0	0	97.8	3.3	24.2	6.3	3.5	6.4	117.5	219.8	0	289.1	0	0	0

典據）**表 5** に同じ。

いた。これに對して、一九一〇～三七年における中國國内の米穀の出回り量は、海關統計に表れたものだけを見ても、少ない年でさえも一八〇萬擔、逆に最も多い年には一、二〇〇萬擔にも達していた。なお、その移出地としては、安徽省蕪湖が壓倒的に主要な地位を占め、これに江西省九江、湖北省漢口、湖南省長沙・岳州（岳陽）、上海などが續いており、ほぼ長江の中流域に集中していたと見なすことができ、中國海關貿易統計から見ると、米穀の移出における江蘇省の占める位置は低い。

一方、**表6**を見ると、一九一〇～三七年における米穀の移入地は、全國各地に普く廣がっているという印象を受けるが、移入量は廣州・汕頭・拱北・三水などの廣東省沿海部地域が壓倒的に多く、これに上海、天津、浙江省寧波、福建省福州・廈門、東北の大連などが續き、中國東部の沿海部地域にやや集中していた。なお、すでに見たように、上海が必ずしも主要な産米地ではなかったにもかかわらず、米穀の主要な移出地の一つとなっていたのは、米穀の主要な移入地となっていたことによることが改めて確認できる。

次に、長江下流域における米の流通事情を主要な米市に注目しながら見ておきたい。

まず、米の最大の消費地・集散地だった上海の狀況を見てみると、ジャポニカ種の中では白粳米の販賣量が最大で、その生産地は常熟・無錫・常州・宜興・崑山・江陰・蘇州・吳江の八縣で、常熟米が最も良質で高價で、無錫米がこれに次いだ。他方、インディカ種の中では杜子秈（杜尖）の販賣量が非常に多く、ジャポニカ種米よりも安價だったので、中下層民に歡迎され、宜興・崑山・吳江・松江などの諸縣が生産地となっていた。なお、江蘇省外の主に安徽省から、次いで江西・湖北・湖南から移入されたインディカ種米は、客秈と呼ばれ、江蘇省産の米に比べると、品質はやや劣っていたが、安價だった(53)。

南京米市に出廻る米の生産地は、無錫・吳江・吳縣・武進・高淳・句容・溧水及び南京周邊と安徽省宣城・蕪湖などで、「出廻總數約二百萬石の中九十萬乃至百萬石は南京に於て消費され、その他は再輸出される。大部分は上海に輸送され」

た。また、鎭江米市における米の取扱量は年間約一〇〇萬石で、安徽省からの米が最も多く、次いで「江北各地産の米穀の大部分は寶應、興化、高郵、泰興、阜寧、鹽城、東臺、諸縣より漕河を經或ひは直接邵伯に出廻る（邵伯は江北に於ける米市であつて、一應ここに出廻り、更に鎭江に輸送される）」のであり、仕向地は上海が最も多かった。さらに、無錫への米の出廻り量は年間約四〇〇萬石で、その出廻り先は安徽省が四二・八%、無錫を含む蘇南各縣が四九・三%、蘇北各縣が二・九%などとなっており、一方、仕向地は上海が最も多く、年間約三八〇～三九〇萬石を再移出していた。そして、上海へ流入する米の總量は年間約六〇〇～七〇〇萬石で、移入先は安徽省・蘇南・外國が主で、蘇北からはほとんどなかった。[54] なお、社會經濟調査所によれば、鎭江米市に流入する約二〇〇萬石の米のうち、安徽省から來る米（上河稻）が六一・四%、また、江都・高郵・寶應・東臺・六合・興化などの諸縣から來る米（下河稻）が二三・三%で、「何れも秈米（俗にいふ南京米）が大多數」だった。[55] すなわち、江南における主要な米市の一つである鎭江には主に安徽省から米が移入され、これに蘇北からの米を加えると、約八五%に達したが、それらの大部分はインディカ種米だった。

無錫や蘇州では、食用米を自給できなかったにもかかわらず、大量の米を他縣から移入して上海に移出していた。また、武進縣や丹陽縣では、ジャポニカ種米を食する經濟力のない農民が低廉なインディカ種米やトウモロコシなどを移入して食用としており、その移入量はジャポニカ種米の移出量の數倍にも達していたとされ、生産されたジャポニカ種米の三〇%以上が移出され、自家消費用は七〇%にも滿たなかった。[56] さらに、「宜興の粳米は、質がよく値が高いので、一般平民は享受できないから、艀船にのせて無錫へ持つて來、その空船を利用して秈米を運搬して歸るのである。金壇は糯米を多く產する。糯米は移出されるが、秈米は不足になる。[57]」とされている。そもそも、「丹陽、金壇ノ各縣ハ多ク糯米ヲ產シ」、「金壇產米ノ品質ハ稍優ルモ產量僅少ニシテ、販路ハ丹陽ノ如ク廣大ナラズ」、しかも、丹陽から移出された「糯米ハ紹興ニ運銷シ酒類釀造ニ使用ス。毎年四〇萬元ヲ下ラズ。他地方ヨリ運入スルモノハ則チ白米ナリ、該縣ノ白米需要ハ甚ダ多」[58]かった。

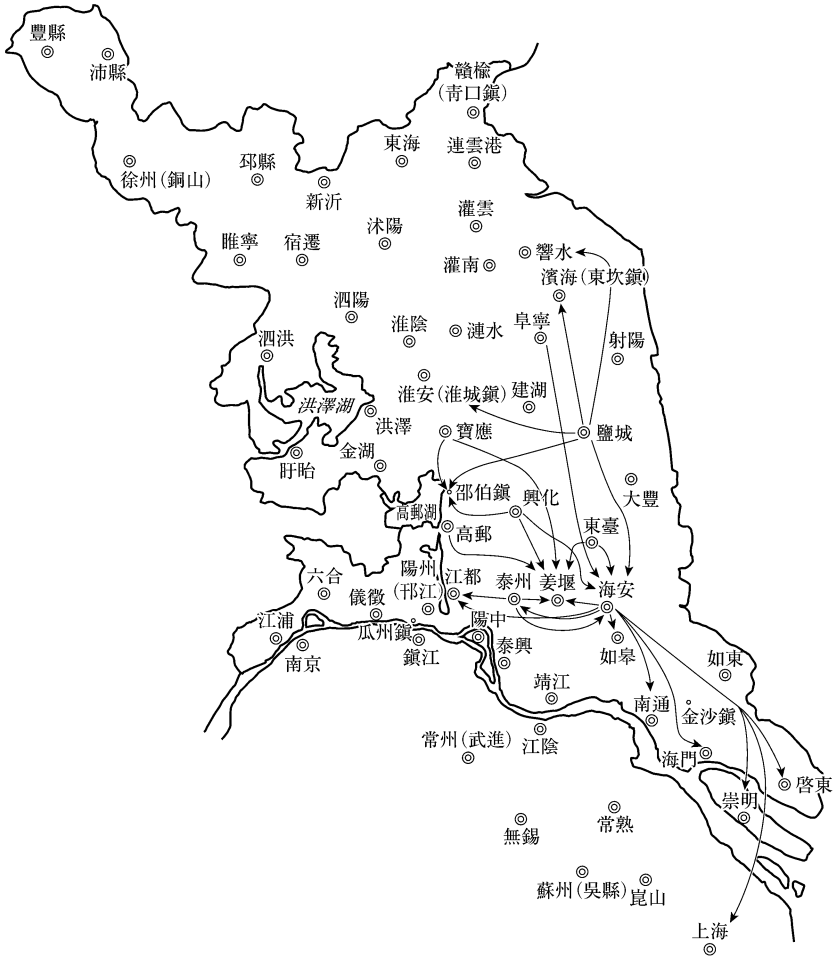
以上から、武進・丹陽・宜興などの蘇南各縣ではモチ米やジャポニカ種米が當初から販賣目的で栽培され、とりわけ貧しい農家は自家作のジャポニカ種米を全て販賣し、食用米としてはジャポニカ種米よりも安價なインディカ種米を購入していたが、モチ米やジャポニカ種米は無錫に集められ、逆に無錫からインディカ種米を購入して消費していたことがわかった。

では、蘇北の狀況はどうだったのだろうか。特に、蘇北における主要な産米地だった裏下河地區各縣における米の流通事情について以下に見ておこう。

鹽城縣では、平年作の場合、生産された五〇〇～六〇〇萬石の米のうち、縣内の消費分を除いて二〇〇～三〇〇萬石を殘すことができ、農民は秋の收穫が終わると、舟で米を姜堰や泰潼（泰興市）などに運んで販賣した。下河の七つの州縣は「産米最旺之區」と稱されていたが、しばしば豊作によって米價が下落した。近代以降の經過を振り返ってみると、同治年間初めに鹽城縣で海禁が解かれ、年間數十萬石もの米が移出され、日清戰爭の頃には蘇北の最北端の徐州や海州が頻りに不作に見舞われ、米價が高騰した。鹽城縣の米は、南は江都縣邵伯・仙女廟（江都鎭）・姜堰や海安縣海安・曲塘などに、北は東坎（濱海市）・羊塞・北沙・響水口などに轉賣された。民國時期には米市が移轉して米業が不振となったが、第一次世界大戰が勃發すると、特に米價が高騰し、縣内は連年豊作だったこともあって一時は農村が繁榮に向かった。ところが、その後もしばしば凶作に見舞われ、一九三二年秋には穀物價格が暴落したが、一九三四年には江浙一帶が干害に見舞われて穀物價格が再度高騰し、一九三五年には下河で大豊作となった(59)。このように、鹽城縣では、米の生産量と販賣價格が非常に激しく變動していた。

鹽城縣南部地域の米は泰縣・姜堰・海安に販賣され、西北部地域の米はその多くが淮安に販賣された(60)。そして、江北の米碼頭とも呼ばれていた海安に裏下河地區から集められてきた米は、主要な棉産地で米不足が常態となっていた蘇北最南端の如皐・南通・海門・啓東などの諸縣へ運ばれた(61)。

圖 1　蘇北裏下河地區からの米流動



以上に述べてきたことから、蘇北における米の主要な流れをまとめたのが**圖1**である。

以上から、長江中下流域の安徽・江西・湖北・湖南の諸省と蘇北の裏下河地區で生産されたインディカ種米は、蘇南で生産されたジャポニカ種米に比べて品質は劣るものの、安價だったため、南通縣などの蘇北最南端の長江沿岸地域に大量に販賣され、さらに、主に鎭江米市を通じて蘇南にも相當量が販賣されたことがわかった。

（二）肥　料

二〇世紀前半の華中では、肥料としては化學肥料よりも依然として豆餠（大豆粕）、棉子餠、花生餠、菜子餠などが多く用いられたが、大豆粕が最も多く用いられた。

足立啓二は、肥料や飼料としての大豆粕が清代中期までに「東北地方・山東省・河南省・江蘇安徽兩省北部方面」から上海に大量に移出され、長江下流域での大豆粕を使用した商業的農業を發展させたが、一八六〇～七〇年代には、大豆粕價格の上昇、農産物價格の下落、勞賃の上昇によって「雇傭勞働から自家勞働への引きもどし、金肥から自給肥料への引きもどし」が起こり、商業的農業が後退したとしている(62)。では、二〇世紀前半の華中における肥料の狀況はどうなっていたのだろうか。

まず、大豆粕の流通について、中國海關貿易統計を利用しながら概觀しておきたい。

表7を見ると、大豆粕の輸出量は、一九一〇～三一年には國內出廻量をも含めた全移輸出量の六～七割を占め、また、一九〇八年以降に急增し、一九〇九年からは一、〇〇〇萬擔を超え、さらに、一九一九年からは二、〇〇〇萬擔を超えることが多くなっていたが、一九三一年の滿州事變と一九三二年の滿州國の成立を受けて一九三二年以降激減し、一九三三年からはほぼ途絶している。統計上は、大豆粕の日本への輸出が一九三三年からほぼ途絶しているが、大連を中心とする牛莊・安東・綏芬河・哈爾濱などの東北各地から移輸出されていた大豆粕のほとんど大部分が日本に向けて販賣されていた。

表 7　豆餅の移輸出量（單位：萬擔，1934年から萬公擔）

年度	輸出量	主要輸出國先	移輸出量	主要移輸出地							
	合計	日本	合計	大連	牛莊	安東	綏芬河	哈爾濱	煙臺	漢口	鎭江
1902	389.2										
1903	340.3										
1904	115.0										
1905	289.7										
1908	783.0										
1909	1,008.8										
1910	736.4	711.1	1,172.8	394.5	475.2	18.0	17.4	0.9	46.8	190.1	14.9
1911	1,037.8	1,007.9	1,524.9	685.2	558.3	49.7	23.1	0.9	53.1	133.6	0.3
1912	816.2	779.7	1,335.5	563.2	395.4	60.1	20.6	1.1	37.1	211.6	14.1
1913	1,181.8	1,142.4	1,694.9	845.9	422.8	54.4	23.8	0.6	32.9	231.5	50.0
1914	1,076.9	1,030.5	1,477.9	801.2	318.6	41.3	0	1.0	27.1	190.6	32.5
1915	1,159.3	1,033.8	1,869.6	1,003.6	408.6	75.3	0	6.7	29.0	223.2	4.9
1916	1,163.6	1,037.5	1,731.0	1,002.5	291.1	73.9	0	1.7	8.4	225.0	5.1
1917	1,551.2	1,347.3	2,047.9	1,301.7	226.6	169.7	173.6	0.3	18.4	137.5	2.1
1918	1,636.6	1,515.0	1,981.1	1,466.3	175.8	145.5	53.6	0	3.1	118.8	3.5
1919	2,072.4	1,962.2	2,428.2	1,5942	331.0	185.8	49.8	0.2	21.3	181.8	8.6
1920	1,899.8	1,814.1	2,391.0	1,6856	280.5	180.2	0	12.2	8.9	156.5	12.5
1921	2,228.1	2,028.6	2,637.2	1,767.4	329.0	216.8	0	153.5	15.8	101.1	16.6
1922	2,159.0	1,836.1	2,785.1	1,828.5	350.0	220.2	0	262.7	12.0	92.5	0.4
1923	2,478.5	2,008.4	3,089.6	1,925.8	386.4	264.6	0	402.8	9.8	68.2	11.2
1924	2,257.7	1,965.8	2,889.1	2,044.4	263.3	186.6	0	211.6	5.9	160.0	4.3
1925	2,066.1	1,689.0	2,671.5	1,836.9	316.1	174.6	0	277.7	2.3	59.4	1.6
1926	2,605.4	1,785.1	3,260.6	1,992.6	261.8	266.0	0	655.8	7.5	70.6	0.5
1927	2,434.9	1,468.1	3,264.2	1,889.6	268.2	333.5	0	753.5	0.4	13.8	0
1928	2,135.1	1,187.0	2,688.2	1,410.9	301.8	246.0	0	710.3	2.3	13.1	0
1929	1,871.5	1,105.0	2,258.2	1,221.8	309.8	237.0	0	479.1	3.0	4.8	0
1930	1,959.6	997.1	2,437.8	1,217.4	197.4	228.4	0	789.0	0	3.7	0
1931	2,323.1	1,239.9	3,082.8	1,426.7	486.0	266.2	0	868.6	0	31.8	0
1932	1,083.5	754.8	316.2	167.3	93.2	49.8	0	0	0	2.9	0
1933	6.2	0	112.0	0	0	0	0	0	3.3	55.4	0
1934	2.3	0	205.2	0	0	0	0	0	0	130.8	0
1935	0.4	0	207.5	0	0	0	0	0	0.8	119.2	0.1
1936	21.3	19.6	150.9	0	0	0	0	0	0	101.5	0
1937	1.7	0.1	132.5	0	0	0	0	0	0	84.9	0

典據）**表 5** に同じ。ただし，移輸出量合計は，1932年から移出量のみの合計となっている。また，輸出相手國の日本には臺灣が含まれている。

表 8　豆餅の移入量（單位：萬擔，1934年から萬公擔）

年度	移入量合計	主要移入地					
		福州	廈門	汕頭	廣州	上海	杭州
1914	392.7	2.9	87.6	264.8	22.5	0	15.8
1915	671.0	11.6	131.2	341.7	20.3	103.4	53.9
1916	558.3	10.4	97.9	331.0	15.1	33.8	41.7
1917	486.5	7.9	68.7	286.3	13.4	45.0	47.2
1918	331.7	8.2	37.7	193.2	3.8	17.1	32.4
1919	356.9	9.5	79.1	254.6	11.5	0	3.2
1920	473.0	6.1	99.5	287.8	17.6	32.1	2.0
1921	407.7	7.1	94.1	297.4	18.2	0	0.2
1922	601.7	3.0	155.2	334.5	29.9	55.5	2.4
1923	595.2	6.7	158.6	322.7	45.7	21.2	1.4
1924	552.5	5.6	100.3	350.5	33.6	37.4	0.5
1925	515.1	4.5	76.6	283.4	25.6	85.7	2.4
1926	568.3	13.6	105.2	314.5	33.4	74.0	1.5
1927	677.0	7.2	115.0	330.9	38.1	137.2	3.6
1928	481.9	10.3	84.3	263.2	30.4	62.0	0.5
1929	278.8	6.6	49.0	160.7	16.3	32.3	1.0
1930	383.0	11.7	57.7	239.9	12.7	35.3	0.8
1931	621.7	11.4	102.0	371.0	41.0	47.1	0
1932	663.5	5.8	97.0	339.1	67.8	99.0	0
1933	494.1	34.3	70.6	260.2	24.5	24.4	0
1934	350.1	4.5	32.7	210.3	13.0	19.8	0
1935	353.3	2.3	28.4	203.1	28.6	10.7	0
1936	227.8	2.7	23.3	138.9	4.4	10.3	0
1937	218.3	4.7	17.7	144.0	15.6	2.4	0

典據）**表 5** に同じ。

大豆粕の移入は廣東省沿海部地域に集中していたことがわかる。

以上、大豆粕については、長江中流域の漢口が移出地としてやや注目しうるものの、主要な移出地は大連を中心とする東北各地であり、また、その多くは日本に向けて輸出されており、一方、中國國内では汕頭を中心とする廣東省が主要な移入地となっており、上海などの華中への移入量はわずかだった。

次に、中國海關貿易統計以外の資料を利用して上海市と江蘇省各地における大豆粕の流通事情を見ておきたい。

なお、東北以外の大豆粕の仕出し地としては長江中流域に位置する漢口が注目されるが、一九三四年以降は東北からの大豆粕の移出がほぼ途絶したことによって漢口が相對的に大豆粕の主要な仕出し地となった。

一方、**表 8** を見ると、大豆粕の國内出廻り量は、一九一四～三一年には輸出量をも含めた全體の中で三割弱～四割弱を占め、一九一四～三七年における大豆粕の移入量は汕頭が壓倒的に多く、これに廈門・廣州・上海・福州・杭州などが次いでいたが、杭州への移入は一九一九年以降ほぼ途絶しており、

まず、蘇南を見てみると、全體の數量は不明だが、嘉定縣では、一九三四年に合作社を通じて購入された大豆粕は一、三〇〇片（一、八八八元）にすぎず[63]、また、宜興縣和橋鎭で販賣された大豆粕には、六合縣産の六合餅（一片＝二四斤）、主に蘇南の宜興縣・常州・無錫縣で生産され、鎭江・丹陽・揚中や蘇北の阜寧・江都・六合などの諸縣でも生産された九斤王（一片＝九斤ないし八斤一二兩）、大連産で上海經由の海餅（一片＝四八斤）の三種類あり、九斤王が約五五％、六合餅が三七～三八％を占めており、一九二九年に約一、三〇〇萬斤だった大豆粕の販賣量は、一九三二年に九〇〇餘萬斤に減少したというから[64]、一九二〇～三〇年代にも大量の大豆粕が肥料として用いられたが、大豆粕の仕出地は蘇北が中心で、東北はわずかだった。

他方、蘇北における肥料の狀況について見てみると、『續修鹽城縣志』（一九三六年）によれば、鹽城縣の肥料の中心は糞で、大豆粕の使用は稀であり、また、農民は農閑期に舟に自らが生産した米穀を積み、北は淮陰・阜寧から南は長江を越えて江南まで賣りに行き、糞を買って歸って來たとされており[65]、鹽城縣から南通縣や如皐縣に販賣される商品の中心は米と鹽で、大豆粕も南方に向けて販賣され、江南で肥料として用いられたという[66]。

逆に、蘇北の農民が蘇南の人糞を肥料として使用していたことが、蘇南社會にとっても必要不可缺だったことは、一九三四年夏、蘇州では、旱魃で河川が枯れて、「糞船」が通航できず、「糞夫」の作業が困難になり、街中に惡臭が充滿し、衞生上極めて重大な問題となって、パニック狀態を釀成したことからもわかる[67]。

東臺縣では、稻作の肥料として用いた草木灰・大豆粕・人畜糞尿・綠肥などのうち、大豆粕は縣内産のもの以外に常に鹽城縣から購入していたが、價格を比べると、大豆粕が一片で一四〇兩（約五二八kg）のものが四角、一三〇兩（約四九一kg）のものが三八角だったのに對して、その他は一擔（約六〇kg）につき、草木灰が一五角、人糞が二角、豚糞が一六角であり、大豆粕は非常に高價だった[68]。

海安は、興化・阜寧・鹽城・東臺・泰縣・如皐・南通・海門・啓東の九縣における物産の集散地となっており、一九三

○年頃には、阜寧縣から約七〇萬片、泰縣から二〇萬片餘り、東臺縣と興化縣から約二〇萬片、計一一〇萬片の大豆粕を移入し、如皐縣に約五三萬片、南通縣に約三五萬片、海門縣に約一〇萬片、啓東縣に約三萬片、江南の無錫・常熟・崑山の三縣に五～六萬片の大豆粕を移出した[69]。このように、蘇北における大豆粕の流通は、米のそれとほぼ一致し、海安が大豆粕でも蘇北の中心的な集散地となっていた。

『贛榆縣志』（一八八八年）によれば、贛榆縣では大豆が栽培され、大豆から油を搾り、商人が大豆油・大豆粕を周邊各地に賣りに行って利益を得て、往々にして大金持ちになったという[70]。また、『支那省別全誌』第一五巻（一九二〇年）は、贛榆縣歡墩埠では「豆、高粱、小麥等の產出多きも、米を產すること極めて小量なり、油坊比較的多く豆油及び豆餅を製造し、生業上頗る重きをなす」と報告している[71]。具體的な販賣先・販賣量は不明だが、相當量の大豆粕が南へ向かって流れていたことが推定される。

一九三〇年頃における大豆の生產量は、阜寧縣が三三萬擔餘り、漣水縣が六六萬擔、灌雲縣が五三萬擔、興化縣が約五萬擔、東臺縣が五萬擔、泰縣が一一萬擔で、漣水縣と灌雲縣の大豆はその多くが阜寧縣に移出されていた。搾油を行なう油坊は阜寧縣に二〇〇軒餘り、興化縣に約一〇〇軒、東臺縣に一一〇軒餘り、泰縣に四〇〇軒餘りあり、泰縣の油坊は數が多かったが、規模が小さく、大豆粕の生產量は阜寧縣のそれに遠く及ばず[72]、抗日戰爭直前には八〇軒餘りとなり、しかも、その大豆粕の多くは泰縣では養豚の飼料として使用されたとされている[73]。

阜寧縣東坎鎭（現在は濱海縣）は、夏作の中心が大豆で、油坊（正坊・中坊・小坊）が一五軒あり、小坊を除く一一軒の油坊で毎日三〇～四〇搾（一搾＝二二片、一片＝一四二兩）の大豆粕（九斤王）が生產されたというから、三ヶ月餘りで約六六～八八萬片の大豆粕が生產されたことになり、毎年五月と六月には油坊の生產が完全に停止したものの、一五軒の油坊が年間に生產する大豆粕は相當量に達したものと推測されるが、大豆粕は當地ではほとんど用いられず、蘇北の如皐縣・南通縣・泰州（泰縣）・東臺縣などや蘇南の常州・宜興縣・無錫縣・江陰縣・常熟縣などに販賣された[74]。

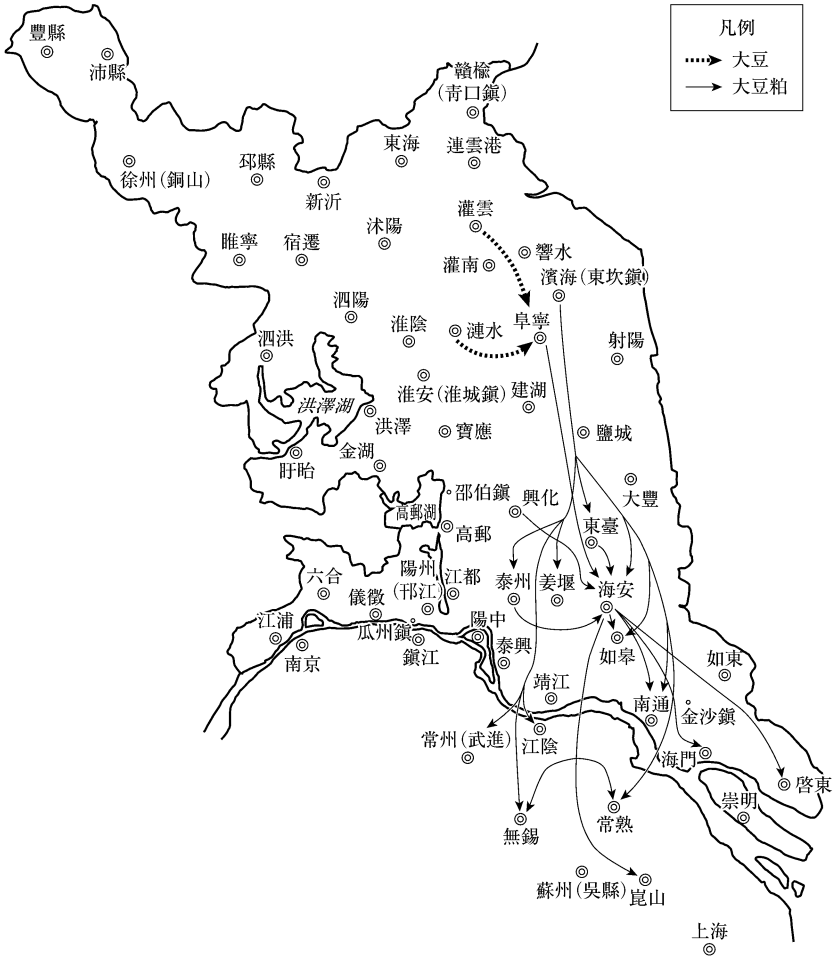
また、『阜寧縣志』（光緒一二年）には、八灘・東坎・羊塞・東溝などから舟で常州や無錫へ大豆粕が集中して輸送されたとあり[75]、あるいは、『阜寧縣新志』（一九三四年）には、阜寧縣における大豆油・大豆粕の生産は、東坎が最も盛んで、八灘がこれに次ぎ、大豆粕は、海安・姜堰などに轉賣されて肥料になったとある[76]。そして、『江都縣續志』（一九二六年）にも、仙女鎮一帯で大量の大豆油や大豆粕が生産され[77]、大橋では大量の大豆粕が江南に販賣され、東郭鄉では大豆・大豆油・大豆粕の年間販賣額が約八萬兩だったとあり[78]、『甘泉縣續志』（一九二六年）にも、邵伯の近くの眞武廟で大量の大豆油や大豆粕が販賣されていたとある[79]。さらに、『續纂山陽縣志』（一九二一年）によれば、淮安では大豆の生産が盛んで、その名が遠くまで知れ渡り、江南から多くの商人が舟で買附にきたという[80]。

以上に述べてきたことから、蘇北の大豆・大豆粕の主な流れをまとめたのが**圖2**である。

一九三五～三六年には、國内の必要分を犧牲にしてまで、外國特に日本へ大量の棉實粕や大豆粕が輸出され、一方、二〇世紀初頭から輸入が始まった化學肥料は、大部分が肥田粉と呼ばれた硫酸アンモニウム（硫安）で、その消費地は「浙江省が最多く、次に江蘇、湖北の順」だったが、「南京、蕪湖方面及江北一帶には未だ殆ど消費されてゐな」かった[81]。

江蘇省における化學肥料の消費量は、一九三四年に二、八一五㌧、一九三五年に一、九二七㌧だったが、一九三六年には八、四三一㌧に激増した。一九三四年には、吳江が一、〇六八㌧（三六％）で最も多く、青浦が二四九㌧、松江が二四二㌧、吳縣が二二六㌧、崇明が二〇六㌧などと續き、一九三五年には、吳江が八一九㌧（四六％）で最も多く、崇明が二二六㌧、吳縣が一七二㌧などと續き、一九三六年には、吳江が二、四四七㌧（二九％）で最も多く、松江が九四七㌧、常州が八六七㌧、青浦が八四八㌧、崇明が五七六㌧、吳縣が四四八㌧などと續いていた。このように、化學肥料の消費量が一九三五年に減少したのは、一九三五年に大豆粕の價格が一九三四年よりも安くなり、化學肥料に代えて油粕を用いたためとされ、また、一九三六年に化學肥料の流入が激增したのは、國產の有機肥料が幣制改革の影響を受けて價格が高騰し、相對的に化學肥料が安くなったからだとされている[82]。ちなみに、江蘇省に隣接する浙江省でも、東北の大連や牛莊などから上海を

圖 2　蘇北における大豆・大豆粕の流動



經由して大豆粕を移入していたが、一九二〇年代中頃には變化が生じていた。例えば、永嘉縣では、かつて家畜の糞を基肥、人糞尿・大豆粕・トウハゼ搾滓を追肥として用いていたが、農地一畝につき、大豆粕が二元以上を必要としたのに對して、硫安は一・五元分で充分だったので、硫安を多く用いるようになり、溫州では一九二五年の大豆粕の移入量は一九二四年の三分の二に減少した。(83)

なお、蘇北の畜産は、「農産物の增產と密接なる關係を有」し、「自給肥料の給源として重要」だったとされ、「江都、儀徵、高郵、寶應、興化は主として水田多く、水田多き處は耕作用として水牛の飼育盛んにして、又灌漑水路の便あるを以て自然其の方面には、鷄、鴈、鶩の飼育も從つて盛んで」、一方、「如皐、泰縣、東臺、鹽城の線には畑作多く」、「豚の飼育盛んにして黃牛又多」く、(84)また、上海市の「鷄鴨及野禽ハ大部分江地(ママ)ノ如皐、泰州、楊州、靖江、淮安等ヨリ移入サレ」ていた。(85)

以上から、蘇北では、大量の大豆が生產され、大豆粕も多く生產されたが、大豆粕を肥料として使用することはほとんどなく、肥料としては主に人糞が用いられ、人糞は江南からも多く購入された。これに對して、江南では、肥料として大豆粕が多く用いられ、東北の營口や大連から上海を經由して購入されただけでなく、蘇北からも流入していたが、やがて大豆粕に代わって硫安などの化學肥料も普及し始めていたことがわかった。また、蘇北では、肥料として畜產から家畜の糞を採取するとともに、飼育した牛・豚・家禽類のほとんどを上海に向けて販賣しており、一方、上海に出廻る牛・豚・家禽類の多くが蘇北から移入されており、この點からも蘇北と蘇南の結び附きの強さを見ることができる。

おわりに

蘇北と蘇南の農村社會は、後進地域と先進地域として並存していたのではなく、構造的な關連性の中で相互に規定し合いながら各々の經濟的な位置を形成していった。とりわけ、近代における蘇北と蘇南の農村經濟は、表裏一體のものとし

て連動して展開する面がより一層多くなり、蘇南農業の再生産は、蘇北からの食用米としてのインディカ種米や肥料としての大豆粕などの流入によって支えられて成り立っていた面が多かった。

まず、米について言えば、裏下河地區で蘇南向けのインディカ種米が生産され、蘇南ではその安價なインディカ種米を購入・消費することができたことによって、ジャポニカ種米を商品として生産するようになっていた。蘇南におけるジャポニカ種米の生産とその販賣は、安徽省や蘇北からの大量で安價なインディカ種米の供給があってはじめて成り立っていたのであり、逆に、蘇北におけるインディカ種米の生産とその販賣は、蘇南における大量で安定的なインディカ種米に對する需要があって可能となった。

また、肥料について言えば、蘇北から蘇南への大豆粕の流入と蘇南から蘇北への人糞の流入とがあって、兩地域の農耕が相互に維持されていたのである。しかも、一九三〇年代に東北や華北からの大豆粕の流入が途絶したことは、蘇南農村經濟の蘇北農村經濟に對する依存度をより一層高めることになったと考えられる。

こうして形成された農村經濟構造の中で、蘇北農村社會も停滯したままではなく、地域差を生じつつも一定程度の發展・變化を遂げていった。すなわち、近代に裏下河地區は徐々に安定的かつ大量のインディカ種米を生産できる主要な産米地として發展し始めるようになり、それを一方では海安を通じて南通・海門・啓東などの諸縣に、また他方では蘇南の西部地域の南京・鎭江などの米市に供給していた。

さて、江蘇省で生産された米は、農家が自家消費した餘剩米を販賣するのではなく、基本的には生産した米は全て販賣された。例えば、蘇南の農民は、主にジャポニカ種ウルチ米を生産してその全てを販賣し、安徽省や蘇北の裏下河地區で生産された安價なインディカ種ウルチ米を自家消費用として購入した。他方、主にインディカ種ウルチ米を生産・販賣する裏下河地區の農民は麥類や雜穀類を常食としていた。だが、蘇北と蘇南における農村經濟の關係は、豊かな先進地域と貧しい後進地域として並存していたのではなく、構造的なものになっていた。例えば、蘇北から大豆粕が蘇南に移出され

て肥料となって生産コストをかけながらも高價な米を生産していたのと並行するように、蘇南の人糞が蘇北に運ばれて肥料として用いられて生産コストを引き下げて安價な米を生産していた。

このように、蘇北と蘇南の間に農業生産力に格差があったことは確かだが、その格差は農村經濟が發展する中で構造的に生み出されていたと言える。

註

（1）曾濟寛「開發蘇北蠶桑事業之必要與實施辦法」（『江蘇合作』第二一期、一九三七年四月一六日）。

（2）これらの事情に關しては、西澤治彦「（書評）Emily Honig, *Creating Chinese Ethnicity: Subei People in Shanghai, 1850～1980*. Yale University Press, 1992. 174p.」（『近きに在りて』第二四號、一九九三年一一月）が言及しており、參考になった。

（3）拙著『華中農村經濟と近代化――近代中國農村經濟史像の再構築への試み』（汲古書院、二〇〇四年）第二編第四章　蘇北土布業の二重性を參照。

（4）許道夫編『中國近代農業生産及貿易統計資料』（上海人民出版社、一九八三年）二三頁の表5より算出した。江蘇省の産米量は八、八〇八萬擔だった。ちなみに、浙江省は六、九七八萬擔、安徽省は四、四〇〇萬擔で、一九三三年と比べると、各々、二・六九倍、四・〇六倍となっている。

（5）朱西周編『米』（中國銀行經濟研究室、一九三七年）一一〇頁。

（6）谷光隆編『東亞同文書院大運河調査報告書』（愛知大學、一九九二年）六二八～六二九頁。なお、同書によれば、一石は日本の六斗にあたるとしている。また、江蘇省の主要な米産地については、すでにほぼ同内容のことが在上海本省實業練習生中村惣治「支那江蘇、安徽米に關する調査」（『貿易時報』第一卷第四號、一九一四年五月一日）二五頁に記載されており、參照にしたのではないかと思われる。

（7）前揭書、拙著『華中農村經濟と近代化――近代中國農村經濟史像の再構築への試み』第二編第二章　上海土布業の近代化を參照。

（8）羊翼成「松江米之分播組織及產量」（『社會經濟月報』第三卷第五期、一九三六年五月）四七頁。

（9）陸樹枏「松青一帶米糧的出產與運銷」（『農行月刊』第四卷第三期、一九三七年三月）八九～九〇頁。

（10）前揭書、『東亞同文書院大運河調査報告書』五二一～五三四頁。

（11）東亞同文會『支那省別全誌』第一五卷　江蘇省（一九二

○年）一八五頁。
（12）同右書、一九一頁。
（13）同右書、二二〇頁。
（14）同右書、二〇〇頁。
（15）同右書、二〇五頁。
（16）「東臺縣之米產調查」（『工商半月刊』第三卷第五號、一九三一年三月一日、調查）二～四頁。
（17）「興化縣米產調查」（『工商半月刊』第三卷第三號、一九三一年二月一日、調查）二四頁。
（18）「泰縣之米產與米碼頭調查」（『工商半月刊』第三卷第一○號、一九三一年五月一五日、調查）二～三頁。
（19）「鹽城縣之米產」（『工商半月刊』第三卷第二號、一九三一年一月一五日、調查）四頁。
（20）林懿均・胡應庚等續修『續修鹽城縣志』（一九三六年）卷四　產殖志、糧食。
（21）上海商業儲蓄銀行調查部編『米』（一九三一年）一五頁。
（22）朱西周編『米』（中國銀行經濟研究室、一九三七年）一○～一一一頁。
（23）興亞院華中連絡部『中支那重要國防資源食糧作物調查報告書』（一九四○年）三～五頁。
（24）黎培敬・吳昆田等『淮安府志』（光緒一○年・一八八四年）卷二　疆域、物產。
（25）童劍塵「淮安農村狀況」（『農村經濟』第一卷第七期、一九三四年五月一日、通訊）九三～九四頁。
（26）張兆棟・丁晏等『山陽縣志』（同治一二年・一八七三年）卷一　疆域、物產。
（27）邱沅・段朝端等『續纂山陽縣志』（一九二一年）卷一　疆域、風俗・物產。
（28）「鹽城縣之米產」（『工商半月刊』第三卷第二號、一九三一年一月一五日、調查）二～四頁。
（29）前揭書、『續修鹽城縣志』（一九三六年）卷四　產殖志、農墾。
（30）謝元福・陳玉樹等『鹽城縣志』（光緒二一年・一八九五年）卷四　貨志、物產。なお、張用熙等『續增高郵州志』（道光二三年・一八四三年修、光緒九年・一八八三年重刊）第二册　貨志、物產、穀屬によれば、當該地域への早稻の導入は、清朝道光一五年に江蘇巡撫が湖北省の早稻種を購入して高郵縣の農民に栽培させたことに始まった。
（31）錢祥保等修・柱邦傑纂『甘泉縣續志』（一九二六年）卷七上　物產攷。
（32）同右書、卷七上　物產攷、穀之屬。
（33）同右書、卷七上　實業攷、商業。
（34）江都市地方志編纂委員會編『江都縣志』（一九九六年、江蘇人民出版社）一八三～一八六頁。
（35）高士鑰・五格等『江都縣志』（乾隆六年・一七四一年修、光緒七年・一八八一年重刊）卷之十一　物產、穀之屬。
（36）趙邦彥・桂邦傑續修『江都縣續志』（一九二六年）卷七上　物產考、天然品、穀之屬。
（37）同右書、卷六　實業考、商業。なお、仙女廟は一九二九年に鎭となり、一九六六年に江都鎭と改名された（前揭書、

『江都縣志』一九九六年、七八頁）。

（38）前掲書、『重修興化縣志』（咸豐二年）巻三　貢賦志、物産。

（39）『續修興化縣志』（一九四四年）巻四　實業誌、農村經濟狀況。

（40）寶應縣地方志編纂委員會編『寶應縣志』（江蘇人民出版社、一九九四年）二二七頁。

（41）孟毓蘭等『重修寶應縣志』（道光二一年・一八四一年）巻之九　災祥。

（42）同右書、巻之九　土産、穀之屬。

（43）戴邦楨・馮煦等重修『寶應縣志』（一九三二年）巻一　疆域、土産、穀之屬。

（44）楊受廷・馬汝舟等『如皋縣志』（嘉慶一三年・一八〇八年）巻六　物産志、穀之屬。

（45）張兆陳・阮本炎等『阜寧縣志』（光緒一二年・一八八六年）巻一　疆域、土産。

（46）吳寶瑜修・途友蘭纂『民國阜寧縣新志』（一九三四年）巻十一　物産志、豆科、黄大豆。

（47）同右書、巻十二　農業志、農作。

（48）阜寧縣縣志編纂委員會編『阜寧縣志』（江蘇科學技術出版社、一九九二年）八六頁。

（49）楊激雲・顧曾烜等『泰興縣志』（光緒一二年・一八八六年）巻第三　分率、物産。

（50）唐雄傑著、秋山洋造譯「安徽、江蘇、浙江、江西四省米穀運輸過程の檢討」（『滿鐵調査月報』第二〇巻第二號、一九四〇年二月）二一一～二一二頁。なお、これは、唐雄傑「皖蘇浙贛署米穀運輸過程之檢討」（『交通雜誌』第五巻第六～七期）の譯文である。

（51）興亞院華中連絡部『中國米』（一九四一年）五五頁。

（52）一九一九年の米穀の輸出量が突出して高くなっているのは、日本の米不足・米騒動に起因する大量買附けの結果であろうか（野澤豊「米騒動と五四運動――東アジアにおける民族、國家の相互關連性をめぐって――」『近きに在りて』（創刊號、一九八一年八月）を參照されたい）。天津からの移輸出量急增の原因と合わせて、今後の檢討課題としたい。

（53）「上海米號業調査」（『工商半月刊』第五巻第一九號、一九三三年一〇月一日、調査）六二頁。

（54）前掲、「安徽、江蘇、浙江、江西四省米穀運輸過程の檢討」二二二～二二九頁。

（55）社會經濟調査所編『鎭江米市調査』（生活社、一九四〇年）五九頁。

（56）實業部國際貿易局編『中國實業誌（江蘇省）』（一九三三年）第五編第一章、二二頁。

（57）社會經濟調査所編『無錫米市調査』（支那經濟資料二二、生活社、一九四〇年）一八頁。

（58）興亞院華中連絡部『中國米』（一九四一年）四一頁。

（59）林懿均・胡應庚等續修『續修鹽城縣志』（一九三六年）巻四　產殖志、糧食。

（60）「鹽城縣之米產」（『工商半月刊』第三巻第二號、一九三

一年一月一五日、調査）八頁。

（61）「泰縣之米產與米碼頭調查」（『工商半月刊』第三卷第一〇號、一九三一年五月一五日、調査）四～五頁。

（62）足立啓二「大豆粕流通と清代の商業的農業」（『東洋史研究』第三七卷第三號、一九七八年一二月）。なお、小瀬一「一九世紀末中國開港場間流通の構造」（『社會經濟史學』第五四卷第五號、一九八九年一月）も、一九世紀末の大豆粕流通に言及しており、參考になった。

（63）張士宏「嘉定縣合作事業進行概況」（『江蘇建設月刊』第二卷第一一期、一九三五年一一月、報告）二三頁。

（64）褚玉如「宜興縣和橋鎭肥料銷售情形」（『農行月刊』第二卷一一期、一九三五年一一月）四七～四八頁。

（65）前揭書、『續修鹽城縣志』（一九三六年）卷四　產殖志、農墾。

（66）同右書、卷四　產殖志、漁航。

（67）「蘇州　蘇城發生三大恐慌」（『申報』一九三四年七月一八日）。

（68）「東臺縣之米產調查」（『工商半月刊』第三卷第五號、一九三一年三月一日、調查）四頁。

（69）「泰縣海安之豆餅業概況」（『工商半月刊』第三卷第二號、一九三一年一月一五日、調查）一一～一二頁。

（70）王豫熙修・張謇纂『光緒贛榆縣志』（一八八八年）卷之三　疆域。

（71）前揭書、『支那省別全誌』第一五卷（一九二〇年）一九〇頁。

（72）註（69）に同じ。

（73）褚挺如「泰縣之猪行」（『農行月刊』第四卷第三期、一九三七年三月）九七頁。

（74）褚如玉「阜寧縣東坎鎭豆餅產銷情形」（『農行月刊』第二卷第一・二號、一九三五年二月、調查）三三～三四頁。

（75）前揭書、『阜寧縣志』（光緒一二年）卷一　疆域、恒產。

（76）前揭書、『民國阜寧縣新志』（一九三四年）卷十一　物產志、豆科、黃大豆。

（77）前揭書、『江都縣續志』（一九二六年）卷七上　物產考、天然品、穀之屬。

（78）同右書、卷六　實業考、商業。

（79）前揭書、『甘泉縣續志』（一九二六年）卷七上　實業攷、商業。

（80）邱沅・段朝端等『續纂山陽縣志』（一九二一年）卷一　疆域、風俗・物產。

（81）岸本清三郎「中支を主としたる肥料問題」（『滿鐵調查月報』第二〇卷第五號、一九四〇年五月）一五二～一六四頁。

（82）李孟麟「本行上海農產運銷處一年來對於人造肥料之管理」（『農行月刊』第二卷一一期、一九三五年一一月）四一～四三頁、同「一年來江蘇省化學肥料之管理」（『農行月刊』第四卷第三期、一九三七年三月）八四～八七頁。元々の單位は包で、一包＝一六五斤（約九九・七kg）としていた。

（83）「溫州之經濟狀況」（『中外經濟周刊』第二〇九號、一九二七年四月三〇日）四～五頁。

（84）大東亞省『蘇北地區綜合調查報告書』（調查資料第一八號、中支調查資料第五八八號、綜合資料第二六號、一九四三年一二月）二六一～二六五頁。

（85）興亞院華中連絡部『上海近郊ノ畜產ニ就テ』（興亞華中資料第二號、中調聯農資料第二號、一九三九年一二月）三五～三六頁・四六頁。なお、同書は、上海市社會局編『上海之農業』（中華書局、一九九三年）第三編「畜產」及び「上海之鮮猪行」・「上海之蛋業調查」（『工商半月刊』第六卷第三號・第四號、一九三四年二月一日・二月一五日）の邦譯である。

di and illuminates the logic of political legitimization that was embedded there by the Manchu people.

ECONOMIC RELATIONS BETWEEN SUBEI AND SUNAN REGARDING THE PRODUCTION OF RICE IN THE FIRST HALF OF THE TWENTIETH CENTURY

BENNO Saiichi

The rice crop in Jiangsu in the first half of the 20th century did not consist of rice grown by farmers for their own consumption and the excess rice sold on the market, but fundamentally all the rice that was produced was sold. In other words, the farmers of Sunan 蘇南 primarily grew non-glutinous Japonica variety rice, sold it all and purchased the less expensive non-glutinous Indica variety rice produced in Anhui and the Lixiahe 裏下河 region of Subei 蘇北 for their household consumption. On the other hand, the farmers of the Lixiahe region of Subei who produced mainly Indica rice sold all of it and purchased less expensive wheat and miscellaneous grains as their staple. Furthermore, just as the soybean wastes were sent from Subei to Sunan turned into fertilizer and higher costs were invested in producing higher value, night soil from Sunan was sent to Subei to be used as fertilizer thus lowering the cost of production of the less expensive variety of rice.

In other words, the production and sale of Japonica variety rice in Sunan was predicated on the massive supply of lower priced Indica variety rice from Anhui and Subei, and conversely the production and sale of Indica variety rice in Subei became possible due to the demand for stable and massive quantities of Indica variety rice in Sunan. Moreover, in regard to fertilizer, with the transfer of soybean wastes from Subei to Sunan and of night soil from Sunan to Subei, the two agricultural areas were mutual dependent. Furthermore, the cessation of the transfer of soybean wastes from Manchuria and Northern China heightened the degree of reliance of economies of Sunan farming villages on those of Subei farming villages.

In this manner, the relationship of the economies of farm villages in Subei and Sunan was structural and not merely the coexistence of a wealthy advanced region and an impoverished backward region. Then, within structure of the farm village

economy formed in this way, as the Lixiahe region of Subei in modern times began to develop as main production center that was gradually able to produce stable and massive quantities of Indica variety rice, and in contrast supplied the rice markets in Nanjing and Zhenjiang in the western regions of Sunan as well as in the provinces of Nantong 南通, Haimen 海門 and Qidong 啓東 via Haian 海安.

THE ORIGINS OF THE SHRINE OF CHINGGIS KHAN

SHIRAISHI Noriyuki

In this study, I have considered the establishment and transfer of the Shrine of Chinggis Khan on the basis of the historical studies of the literature to which I have applied recent archaeological data. As a result, I have made clear that the first Shrine of Chinggis Khan was located at the Avraga site in Khentii Province in Mongolia. This had been the site of Chinggis's palace, the Great Ordo. It has become clear that the palace tent (the lower building) was transformed into the Shrine. It became a Shrine after the capital, Kharakhorum, was built. Later, between the late 13th century and the beginning of the 14th century a new shrine (the upper building) was constructed. This Shrine remained at Avraga area after the demise of the Yuan dynasty until the mid 15th century, and ritual sacrifice of horses and cattles was conducted there continuously.

The Shrine was moved to the Ordus region in Inner Mongolia in the period from the later half of the 15th century and the beginning of the 16th century. It is thought that behind the move were both political turmoil and the decline of nomadic economy that accompanied cooling temperatures. Both the Avraga Shrine and that built at Ordus in the early Qing period were extremely similar in terms structure of the altars, the size, and plan. One can hypothesize that when the Shrine at Ordus was rebuilt, the structure of the building at Avraga was the model to be recreated in the construction.

Future research should be aimed at more concretely illuminating the background and timing of the construction of the Shrine and the reason for the move to Inner Mongolia. For that reason it will be necessary to conduct continuous research of the site.